

## 令和2年度卒業式 式辞

ようやく届く花の便りに心和む今日の佳き日、令和2年度羽衣国際大学卒業証書・学位授与式を挙行できますことは、本学にとって大きな慶びであります。

誠に遺憾ながら本年も昨年と同様、新型コロナウイルス感染を防止する観点から、ご来賓と保護者の皆様を大学にお招きすることができず、大変なご迷惑をおかけ致しました事を、改めてお詫び申し上げます。

\*

\*

さて本日、現代社会学部および人間生活学部の卒業生に「学士」の学位を授与致しました。これから皆さんは大学卒業者として、社会に飛び立つこととなります。法的には既に成年に達しているとはいえ、皆さんは学生として家庭でも社会でも多くの庇護の下で暮らしてきました。しかし今後は学生ではなくなり、そうした安全に守られた環境から飛び出し、一人の大人として社会の中で自立していかなければなりません。今皆さんの多くは社会に飛び立つ期待と不安の中にいることでしょう。しかも昨年来のコロナ禍も新種のウイルスが次々と生まれてくる状況であり、いまだ収束への展望は開けていません。今年中にはワクチンの接種が進み、日本のみならず全世界の人々の健康と安全が回復、維持される事を願うばかりです。

\*

\*

このような世界を覆うコロナ禍は、恐らく世界の歴史に記録されるものでしょう。いずれは歴史の教科書の中に「2020年代初頭、世界を覆ったコロナ禍」として記載されるかもしれません。その意味で私達は今、歴史の大きなうねりの中を歩んでいるといえるのです。

そこでこの機会に皆さんに「歴史」というものを改めて考えて欲しいと思います。「歴史」とは何でしょうか。「歴史」とは誰が作るのでしょうか。

「歴史」といえば、多くの人は聖徳太子や織田信長、アレキサンダー大王やナポレオンといった偉人や哲人を思い出すことでしょう。最近の「歴女」の中には、長曾我部元親や武田勝頼といった、ややマイナーな戦国武将を挙げる人もいるかもしれません。このような歴史の教科書に掲載されるような偉人たちが歴史を作ってきたという歴史に対するイメージは決して間違いとはいえないでしょうが、歴史の全てを語ることはできないと思います。

皆さんは「政井みね」という人を知っていますか。最近のクイズの達人ならともかく、少々歴史に詳しい人でもすぐには思い浮かばないのではないかと思います。

日本は明治時代、殖産興業政策を推し進めましたが、その主要産業は製糸産業でした。製糸とは生糸を紡ぐ仕事であり、この生糸の生産は明治初期から中期の日本の輸出を支えるものでした。つまり日本の近代化を支えた産業であり、この製糸業抜きにして近代日本は成り立たなかったと言えるのです。政井みねさんは、その製糸工場に14歳という若さで働き

に出た女工の一人です。

みねさんは家計を助けるため、長野県岡谷にある製糸工場に出稼ぎに出ます。その途中、野麦峠という峠を越えなければなりません。多くの年若い娘達はその峠を越えて行きましたが、そこで滑落してしまったり、冬の厳寒に耐えられない人達も多かったようです。さらに製糸工場での労働は過酷なものでした。工場での労働は早朝から深夜までで、衛生状態も悪く当時不治の病とされた結核も蔓延しました。みねさんも劣悪な労働環境の中で、結核に侵されてしまいます。病魔に蝕まれたからだで故郷に帰ることになりますが、その途中で野麦峠の茶屋にたどりついたとき、故郷の「飛驒が見える」、と言い残して亡くなってしまいます。20歳の若さでした。

このお話は、山本茂実著「あゝ野麦峠」にあるものですが、政井みねさんは実在の人物であり、映画にもなっています。同様の内容のものに、細井和喜蔵著「女工哀史」があります。

ここで私が皆さんにお伝えしたいのは、「歴史」は名もない一人一人の日々の真剣な暮らしによって作られる、ということです。政井みねさんは、たまたま女工の一人としてその名を残すことになりましたが、みねさん以外にも多くの名もない女工達が工場での労働に打ち込み日本の産業を支えました。その中で懸命に働いた女工達の名を、私達はほとんど知りません。しかし日本の近代化を支えた人たちのかけがいのない人生がそこにはあると思うのです。そしてそうした人たちの人生の積み重ねによって、「歴史」が作りあげられるのではないかと思えてなりません。

\*

\*

これから皆さんが飛び込む社会も決して楽に生活ができるものではないでしょう。悔しくて涙するときもあるでしょう。悲しみで途方にくれるときもあるかもしれません。まして新型コロナウイルスの蔓延という厳しい環境の下で自立が求められています。容易ならざる現実が待ち構えているかと思いますが、そうした中で皆さんの日々の暮らしそのものはおそらく歴史の教科書には載ることはないでしょう。しかし皆さんがコロナ禍において、苦勞して就職活動を行い、悪戦苦闘しながら着実に社会に貢献していくという貴重な体験の集積は、いずれ「歴史」として残るものだと思います。

「明けない夜はない」、また「夜明け前が一番暗い」とも言われます。当面コロナ禍の厳しい社会環境が続くかもしれませんが、決して自分を見失うことなく、着実に一歩ずつ皆さん自身のかげがいのない人生を歩んでほしいと思います。

本学で得た知識や技能を基礎として、さらに学びを続けることによって、この激動の時代を生き抜いてください。皆さんが明るく逞しく、自らの道を切り開き人生の多くの峠を乗り越えていくことを期待して、卒業式の式辞といたします。

令和3年3月20日 羽衣国際大学学長 吉村 宗隆